

書かれた「この地」を読む

📖 みのかもブックマーク



▲鳩吹山から撮影 手前から可児市土田、木曽川、美濃加茂市

いけなみしょうたろう
池波正太郎
(1923-1990)

東京・浅草に生まれる。戦後、東京都職員として働きながら脚本執筆を始める。『鬼平犯科帳』『剣客商売』など江戸時代を題材にした時代小説を発表した。1960年、『錯乱』で直木賞受賞。1977年、吉川英治文学賞受賞。

池波正太郎の青春記

時代小説で知られる池波正太郎は、作家として名を成す前の若い頃に一時期、太田に住んでいました。自身の青春時代をつづった『青春忘れもの(中公文庫・1974年)』には、戦中に国民勤労訓練所に入り、東京・芝浦の萱場製作所の旋盤機械工となった翌年、木曽川畔にできる萱場の新工場で徴用工具に教えるために太田へやって来た経緯が書かれています。1943年7月に操業を開始した土田村の萱場製作所は当時、戦闘機の精密部品を作る軍需工場でした。美濃の太田へ到着した、われら萱場製作所員は太田の町の中の数カ所へ分宿して仕事をはじめることになった。・・・私の旋盤の教え方は、なかなかうまくいったそうである。

エッセイ「私の休日」(『日曜日の万年筆(新潮社・1982年収録)』)にも、太田から渡し舟で工場へ通い、働いていた様子がつづられています。他の人が休む日に働き、人が働く時に休むことが好きだった池波は、工場からの年末年始の出勤要請も快く引き受け、帰京せずに元日から働きます。清々しい文調は、その日々の充足感を伝えているようです。

この年、1944年の1月末、召集礼状を受けた池波は太田を発つて東京へ戻り、2月に横須賀海兵団に入団しています。



▲建設当時の岐阜製造所
『油圧に生き 油圧を超えて 風雪と激動の40年(萱場工業株式会社、1975年)』より

【参考文献】

- ・『カヤバ工業50年史(カヤバ工業株式会社・1986年)』
- ・『可児市史第三巻 通史編 近代(可児市・2010年)』
- ・『カヤバ工業岐阜労働組合 40年のあゆみ(カヤバ工業岐阜労働組合・1987年)』
- ・『完本池波正太郎大成 別巻(講談社・2001年)』